

カナダにおける農業・農村の変容と農村地理学

田 林 明

- | | |
|----------------------------------|----------------------|
| I はしがき | IV-3 兼業化の進展 |
| II カナダにおける農業・農村の形成 | IV-4 農村社会の変容 |
| III カナダにおける農業・農村の衰退と農村地理学
の発展 | V カナダにおける農業・農村の持続的発展 |
| IV 都市縁辺地域に関する農村地理学研究の拡大 | V-1 持続的農業の必要性 |
| IV-1 農業・農村の地域差 | V-2 農村の持続的発展 |
| IV-2 都市化と農業 | V-3 農村地域における中心集落の再生 |
| | VI むすび |

キーワード：農村地理学，都市縁辺地域，持続的発展，カナダ

I は し が き

農村地理学は可視的に農村地域と一般に認識される人口低密度地域における人間の組織や活動に関する地理学的研究であるとされるが (Johnston et al., 1994)，その定義と内容，視点についてはいまだに確立していない。ことに，都市地理学と比較するとその研究分野としての未熟さが指摘されてきた (Lewis, 1979)。現代の農村地域は都市地域と比較してはるかに広大な面積を占め，時間的・空間的に多様に変動しており，この農村地域に関する地理学側面からの系統的研究の推進と蓄積は極めて緊急で重要である。

1950年代までの農村地域を対象とした研究は，農業地理学や集落地理学で取り扱われる内容が圧倒的に多かった。しかし，1960年代からの先進工業国では農村地域は急速に変化し，さらに多様化し，そこで生起する様々な現象に目を向ける必要性がでてきた。例えば，農村地域における第2・3次産業，物資の流動や交通，人口構造，生活の質，社会地理学的・文化地理学的事象など，地理学的に解明されるべき課題が多い (Pacione, 1984)。このような状況のもと，イギリスのH.D.Cloutは1972年に *Rural Geography: An Introductory Survey* を出版し，農村地域を統合的に捉えようとする「農村地理学」を提唱した。この考えにそって，欧米では活発な研究が続いたが，日本では農村地域に関する研究実績は多いが，それぞれ個別に行われる傾向が強く，全体が一つの学問分野として整理・系統化されてはいない。また，石原 (2003) が指摘するように，日本では村落地理学という用語がより好んで使われ，農村地理学の用語は普及していない。村落地理学では，その研究対象が主として農業集落と土地利用，村落社会に限られる傾向が強い。現代の日本における地理学的諸現象は，個別の村落を対象としては論じきれない段階にきており，より広い農村地理学的視点が必要である。

1960年代から1970年代にかけては日本の農村地域を対象とした研究に衰退傾向がみられたが（浜谷，1983），1980年代に入って農村研究に再び活性化の兆しがでてきた．1990年代には日本農業の後退傾向がますます顕著になり（田林，2003），それに伴って農村は大きく変化するとともに，様々な問題が生じてきた．そしてこれらを対象として，多くの研究課題が提起されるようになった．現在こそ，多くの個別的な研究を農村地理学という枠の中に統合し，系統的に整理する必要がある．この研究の最終的な目的は，従来の内外の研究成果の吟味と実証的研究に基づいて，農村地理学の視点と方法を系統的に整理し，日本の農村地理学の内容を具体的に提示することであるが，その基礎的研究の一つとして，農村地理学研究が活発なカナダにおける農業・農村の実態と農村地理学の動向を検討しようとするのがこの報告である．

Ⅱ カナダにおける農業・農村の形成

カナダにおける最初の農業は五大湖・セントローレンス地域の先住民によって少なくとも500年前に始められた．彼らはトウモロコシやカボチャなどの作物を，移動耕作により生産していた．ヨーロッパからの入植者が最初に農地を開墾したのは1603年のことであり，現在のノバスコシア州アナポリスロイヤルにフランス人が入植し，湿地に排水路をつくり，小麦や亜麻，野菜，飼料を栽培し，牛と豚と羊を飼う自給的混合農業を始めた（Throughton，1982）．カナダの農業地域は東から西へ，南から北へ拡大・充実していった．そして現在の範囲まで農業が拡大したのは，ようやく1940年頃であった．アルバータ州とブリティッシュコロンビア州にまたがるピースリバー地域では，1970年代に入っても開拓が続けられていた．

大西洋岸地域では1730年以降ニューイングランド植民地との農産物交易が行われたが，1877年にはフランス系の人々が大西洋岸地域から追われ，それ以降イギリス系の人々が，アナポリスバレーとファンディ湾周辺，セントジョン川流域，そしてプリンスエドワード島を中心に混合農業を行うようになった（Harris and Warkentin，1974）．この地域の農地は1860年から1885年頃に最大になり，穀物や畜産物，果樹が西ヨーロッパとアメリカ合衆国に輸出された．当時は漁業や林業を兼業とする農民が多かった．しかし，カナダ自治領が成立した1867年以降大西洋岸の農業は後退した．

ところで，1608年から1760年までのケベックは，新大陸におけるフランス人の最大の植民地であった．初期のケベックの農業開発は，荘園制のもとに進められた．フランス国王から広大な土地が荘園領主に下付され，この領主が本国で小作人を募集して開拓を進めた．セントローレンス川ぞいの土地が，幅100～150m，奥行きがその10倍の細長い地割に分割され，これがそれぞれの入植者に配分され一つの農場となった．ここでは18世紀の終わりまで自給的農業が行われた（Harris，1966）．この頃の主要な作物は小麦で，牧草と輪作された．牛や羊，豚，馬も飼われたが，畜産物の重要性は低かった．19世紀の後半からアメリカ合衆国の西部開発による小麦市場での競合の激化，モントリオールなどの都市の発展にともなう食料需要の増大から，ケベック農業は小麦中心のものから酪農中心のものに変化していった．

他方，南オンタリオは18世紀中頃まで深い森林に覆われていた．農業開発が始まったのは，アメリ

カ合衆国独立の際にカナダに逃れてきた王党派の人々が、1780年代に入植してからであった。開拓者はオークの森を1年に1 haほど切り開き、馬鈴薯や野菜、小麦などを自給的に栽培し、森の中では牛と豚そして羊を放牧した (Harris and Warkentin, 1974)。入植後3～4年たつと耕地も4 haほどになり、自給用の野菜が栽培されたほかの耕地では小麦がつくられ、これが最も重要な換金作物になった (Jones, 1946)。小麦生産中心の農業は1880年代にピークを迎えたが、1890年代にはいと衰退しはじめ、これに代わって酪農や家畜飼養を中心とした混合農業が発達していった (Kelly, 1973)。

初期の集落のほとんどが川のそばに立地した。そこには製材所や製粉所がつくられた。時間がたつにつれて万屋や鍛冶屋がつくられ、余剰の小麦を利用する醸造所もできた。人口が増加するにつれて教会や学校、ホテル、肉屋、皮なめし工場がつくられた。発展する中心集落では、食料雑貨店や宝石店、乳製品販売店、家畜商、医院、薬局などが開業した。増加する町の人口に対応するように住宅がつくられ、それが周辺の農業の発展にともなってより大規模になり、そいて豪華に飾りつけられるようになった (Spelt, 1972)。1800年代の終わりまでに、繁栄する中心集落は2階建てや3階建ての業務用の建物が並ぶ中心街や立派な教会、川のそばに立地する工場などを誇るようになった (ダムス, 2004)。

1883年に大陸横断鉄道が完成し、さらに耐寒性小麦が導入されたり、大型の農業機械が発明されると、カナダ西部で急速に農業開発が進められた。中央ヨーロッパや東ヨーロッパから多くの移民がカナダの大平原にやってきた。1896年から1914年にかけての農業開発によって、大平原の人口は1881年の12万が1911年の125万になった。そこでは小麦栽培が中心の農業が行われたが、大麦やオート麦、ライ麦なども栽培された。アルバータ州では肉牛の放牧も1900年以降行われるようになった。1930年代の恐慌と旱魃は、大平原の農業を大きく変えた。そして、大平原南部の乾燥地帯の放牧、中央部の小麦栽培、北部の混合農業といった地域分化が進んだ (Lehr, 1998)。

太平洋岸のブリティッシュコロンビア州では19世紀の初め毛皮交易者への食料供給のために農業が小規模に始まったが、その後ゴールドラッシュで流入した人々や鉄道建設、林業、漁業などの労働者によって食料需要が増大し、農業が拡大した。カリブーやシミルカミンなどの内陸部では大規模な牛の放牧が、オカナガンバレーやフレーザーバレーでは、小規模であるが集約的な野菜や果樹の栽培、あるいは酪農が発達した (Kerr, 1952)。

Ⅲ カナダにおける農業・農村の衰退と農村地理学の発展

Troughton (1995) によると、カナダでは学問分野としての農村地理学の発展とは対照的に農村は衰退している。1930年代までカナダの農村地域は拡大基調であった。1930年代と1940年代が発展と衰退の分かれ目であった。大規模化・機械化・商業化に対処できる農場とできない農場がでてきた。そして、農村地域の衰退傾向が明確になった1950年代に農村地理学研究が始まった。そして、これまで一括して捉えられていたカナダの農村地域が、農業の核心地域 (Core agricultural zone) と限界周辺地域 (Marginal periphery zone) と都市縁辺地域 (Rural-urban fringe zone) という3つの類型で考えられるようになった。

1960年代になると大西洋岸やオンタリオやケベックの楕状地などの周辺地域の限界地農業が崩壊した。限界地農業の問題は単一資源に極度に依存したことと、外部によってコントロールされたことである。しかし、この地域への地理学者の関心は低かった。他方では、第2次世界大戦後の都市化により都市縁辺の農村地域は拡大し、これに対して多くの地理学的研究が行われるようになった。人口構造、土地利用、社会・経済的性格、政治的状况からみて、都市縁辺の農村地域は他の農村地域とは性格を異にしており、これが地理学者を引きつけた。

また、南オンタリオや南ケベック、そして大平原などの農業の核心地域では、機械化の進展にともない工業的農業が発達した。カナダの大平原の農業的土地利用に関するここ四半世紀間の最も大きな経済的・環境的に重要な変化は、休閒地が減少したことである。減少率の地域差は土壌水分量によって大きく左右されるが、その主な原因は、化学肥料や農薬の多用、市場の拡大、休閒地がもたらす不利益さの認識によるものである (Carlyle, 1997)。このように農業中核地域では農業地理学的な研究が盛んに行われたが、農業の再構成は政治・経済的な枠組みで捉えられてきた。さらに、より複合的なアプローチが必要であり、それが農村地理学の課題となった。また、農業中核地域では農場数は激減し、農村のサービス機能が低下し、特に大平原ではコミュニティの消滅や弱体化が進み、これが農村地理学の重要な研究対象となった (Everit and Annis, 1992)。

カナダでは農村地域は全体として衰退しているが、農村地理学の課題は増え続けている。現代のカナダの農村地理学研究は、主として都市縁辺地域を対象としている。中でも南オンタリオの都市縁辺地域では多くの研究が行われてきたので、以下ではここに焦点を当てて検討してみよう。Beesley (1991) によると、都市縁辺地域では土地利用の視点と社会的・経済的視点、そして応用的・政策的・計画的視点といった3つの側面から研究が進められ、ワータルー大学やグウェルフ大学が研究をリードしてきた。

IV 都市縁辺地域に関する農村地理学研究の拡大

IV-1 農業・農村の地域差

1963年のReedsのカナダ地理学会における会長演説によると、当時のカナダにおいては農業および農村に関する地理学は、ほとんど注目されなかった分野であった (Reeds, 1964)。Reedsはカナダの農業地理学の先駆者であり、彼の南オンタリオを中心とした精力的な農業地域研究は、カナダの農業・農村地理学研究の出発点となった。Reedsは南オンタリオの作物と家畜の膨大な分布図を作成し、それを野外調査の経験に基づいて整理し農業地域区分図を作成した。そして、ここで明らかになった農業の地域差を自然的・歴史的・経済的・社会的・文化的条件から説明した (Reeds, 1955)。彼はまた、1880年と1951年の2枚の農業地域区分図を比較し、70年間の変化とその要因を検討し、特に自然的因子と都市化に象徴される社会的・経済的因子の重要性を強調した。

1880年の農業地域区分によると、小麦が最も重要な換金作物であり、小麦生産に中心をおく自給的混合農業 (General farmnig) が南オンタリオ全体に広がっており地域差は少なかった。それでも南西端のコーンベルトの原型はできあがっており、果樹栽培がエリー湖とオンタリオ湖ぞいで盛ん

であった。南西部のオックスフォード郡では酪農が、その北東部のドイツ移民の多いところでは亜麻栽培が行われた。1880年から1951年の間に、土壌や気候条件により適合するように、農業が分化していった。ノフォーク地方でタバコ栽培が発達し、トロントの周辺と東オンタリオで酪農が拡大した。トロントからハミルトンを経てナイアガラフォールズに至るオンタリオ湖西岸では、野菜や果樹の生産が発達する一方、都市化・工業化によって農地が急激に減少した (Reeds, 1959)。

1951年以降も南オンタリオでは、農業の地域分化が一層明確となった。The Centre for Resource Development, University of Guelph (1972) は、南オンタリオを (1) 楕状地と (2) 東オンタリオ、(3) 中南・南西オンタリオ、(4) 都市軸、に区分している。楕状地では土地基盤が脆弱で、農産物販売額が少なく、農業人口の高齢化が進んでいる。東オンタリオでも農業が不振であり、それは市場に恵まれないことと、農業経営者の高齢化が進んでいることによる。中南・南西オンタリオは高い生産力と活力のある農業地域で、南オンタリオ農業の核心である。都市軸はオンタリオ湖西岸の都市化地域で、ここでは農業と都市的土地利用の競合が著しい。

南オンタリオの農業地域は、1980年頃にはまず北の楕状地と南の低地に分けることができ、南の低地は混合農業地域と特殊農業地域にさらに細分することができた (Keddie and Mage, 1985)。特殊農業地域として、南西部のコーンベルト、ノフォーク地方のタバコ地域、ナイアガラ半島の果樹地域、そしてトロント周辺の野菜地域をあげることができる。混合農業地域は酪農に特化する東オンタリオと多様な畜産の南西オンタリオの差がある (田林, 1986)。しかし、このような地域差は、1990年代からしだいに不明確になってきている (田林, 2001)。

IV-2 都市化と農業

カナダにおける都市縁辺地域の農村研究の嚆矢はKruegerによるものであり、都市化の影響を受けてナイアガラ果樹地域における土地利用が急速に変化する様相が分析された (Krueger, 1959, 1960)。ナイアガラ果樹地域はオンタリオ湖とナイアガラ・エスカーPMENTに南北をはさまれ、西のハミルトンから東のナイアガラフォールズに至る幅の狭い平野である。気候条件と土壌条件に恵まれ、市場にも近く、カナダ最大の果樹地域が形成されている (田林, 1988)。Krueger (1978) によると、1934年にはわずか5%の都市化された地域しかなかったものが、1975年には34%となり、逆に農村とみなされる地区は、1934年の59%から1975年の28%に減少した。

都市化の影響は果樹園の減少による農業生産の後退のみならず、多方面におよんでいる。それらは開発や投機のために買い取られた果樹園が生産されずに放置されること、兼業農民の増大によって生産性が低下すること、都市の拡大につれて農民は農業の将来性を見通すことができなくなり農地や装備への投資をひかえること、地価の上昇につれて農業規模拡大は困難になり、ますます農地を分割して売却する事例が多くなってきたことなどである (Simpson-Lewis, 1979)。

ナイアガラ果樹地域の研究は、適切な農地資源の保存と管理の必要性を認識させることになり、Krueger (1968, 1969, 1977, 1982, 1984) や Gertler (1970), Galyer (1982a, 1982b) など多くの地理学者がこの課題に取り組むことになった。ナイアガラ果樹地域に対してはカナダでも最も整備

されたとされる地域計画がたてられ、1980年以降の果樹農業の衰退の速度が鈍化した（Galyer, 1991）。

都市縁辺の農業は矛盾に満ちた状況にあり、一方では都市化・工業化によって大きな利益を得ているが、他方では都市地域や工業地域に起因する多くのマイナスの影響も受けている。都市が今後とも成長するかぎり、都市化地域の農民は経済活動や生活をそれに対応させていかなければならない。このような都市縁辺の農業に視点をあて、Bryant and Johnston（1992）は、土地条件や市場、農業経営、政府の役割などから分析を進めた。Bryantら（1982, 1984）やTroughton（1983, 1985）などをはじめ多くが取り上げているように、都市縁辺地域の農業は多様であり、また急速に変化している。

IV-3 兼業化の進展

オンタリオ州では1951年には全体の27%にあたる農場経営者が兼業を行っていたものが、1966年には41%に増加した。その後は大きな変化はなく、およそ半分近くの経営者が兼業に従事している。南オンタリオでは農場経営者の妻や同居家族の多くが農業以外の就業に就くことが多く、カナダにおいても日本のように家族全体の就業形態を考察すべきであるという議論もなされている（Fuller, 1984）。1998年のオンタリオ州政府の統計によると、経営者1人当たりの所得のうち農業所得は33.4%にすぎず、残りは農外収入であった。これは経営者本人のみの数字であって、日本のような同居家族を含む農外収入を考えると、農外就業への依存度はさらに高くなる。

Mage（1975）は南オンタリオの南西部における47人の兼業農民からの詳細な聞き取りによって得られたデータに、多変量解析を適用して兼業農民の分類を試みた。これによって得られた類型は、(1) 比較的高齢な農民で農業に強く依存しているが臨時に兼業を行ったもの、(2) 若くて意欲的な農民で、将来自立経営をめざす資金の蓄積のために兼業を行ったもの、(3) 小規模で趣味的な農場経営を行い、主として都市的な就業から収入を得ている農民、(4) 弁護士、医者、会社経営者など社会的・経済的地位の高い人が、最近都市を離れて農村に住むにあたってかなりの規模の農場を購入し、それを経営しているもの、(5) 都市的な就業につきながらある程度の農業を、長年続けている農民である。これらのうちはじめの2類型は基本的には農業志向であり全体の38%を占め、残りの3類型は兼業志向で全体の62%を占めた。

IV-4 農村社会の変容

カナダの農村地域への都市住民の移動は1950年代に始まり、1970年代前半まで主要都市の縁辺農村地域では、急速にかつ無秩序に都市住民の居住地が拡大した。Bryant and Russwurm（1984）は全国の52の都市縁辺において、1970年代に農村居住の都市住民の割合が急速に拡大したことを明らかにした。トロントはカナダでも最も急速にダイナミックに拡大している都市であり、その縁辺の農村の社会的・経済的変化は著しい。Bunce and Walker（1992）によると、トロントの縁辺の農村地域は、都市化の影響の程度によってexurbs（低密度の都市地域）とsuburbs（低密度の中心集落）、

rural segment（農業中心の近隣社会），small townに分類することができる．都市住民の農村地域への移動は，農村のアメニティを求めておきている．そして農村地域では内的な農業構造の再編と外的な資本の投下がみられる．また，若年人口が農村地域から都市に移動するにともない農村地域の高齢化が進むとともに，都市から高齢者が農村地域に環流するという現象もおきている（Bryant and Joseph, 2001）．

1970年代から1980年代にかけて南オンタリオの農村は大きく変化した．Fuller（1985）は開拓以来の農業の形成と農業発展における政府やアグリビジネス，教育，農業組織の役割についてまず整理し，さらに土壌侵食と農地減少の問題，借地農と自作農の混在，不在地主，特に外国の地主の増加に伴う諸問題，新規就農者の問題，さらには農業者の健康管理問題など検討している．さらに，農村コミュニティにおける女性組織の役割や農村計画への住民の参画，都市化が進行する中での農村コミュニティの存続と活力の維持が重要な課題となっていると指摘している．

南オンタリオの農村社会の変化を「近距離社会」から「工業化社会」，そして「アリーナ社会」への変化として捉える見方もある（ファラー，1998）．南オンタリオでは18～19世紀の入植開拓期に12マイルおきにサービスセンターが配置され，それを中心に大部分の社会的・経済的・政治的活動が行われた．それは中心地に活動が集中する結束力が強く，活動様式が比較的単純な「近距離社会」であった．20世紀においてカナダの小さな町で工業化が進むにつれて，「工業化社会」が近距離社会にとってかわった．そこでは自家用車の普及によって人々の移動性が高まり，仕事と商売，買い物，社会的活動が広い範囲で行われるようになった．住居と仕事の場所が分離した．契約による雇用関係，階層的で権威主義的システム，学歴能力主義など，生活全般が工業的様式のもとで組織されるようになった．「アリーナ社会」は「近距離社会」と「工業化社会」の混合体であり，そこには境界がなく，すべての人々がアリーナでそれぞれの役割を自由に果たす社会である．アリーナ社会は包括的で多様であり，複雑で，機動性に富み，混沌としている（Dahms, 1998a）．

農村地域への人口移動と農村居住の拡大の大きな原因は，人々が農村生活の様々な側面に魅力を感じているからである（Bunce, 1981）．それは農村地域に対する感傷に起因するものであり，農村地域を理想化する北アメリカの文化的伝統によるものである（Bunce, 1994）．農村地域の魅力の一つは，住居や農舎，農場のフェンス，中心集落の街路樹や商店，教会，ホテル，水車小屋と製粉工場などの伝統的建造物であり，それらの要素が造りあげる農村景観である（Dahms, 1988b；McIlwraith, 1995；Halseth, 1995）．その景観的魅力が近年の農村地域の小都市の再生の重要な要因となっている（Dahms, 2001）．

V カナダにおける農業・農村の持続的発展

V-1 持続的農業の必要性

1960年代からの先進工業国における農業の機械化・合理化にともない，農業生産力は向上したが，農業や化学肥料の過剰投入や過耕作・過放牧による土壌侵食などに象徴されるように様々な環境問題が生じてきた．さらに典型的な例が北アメリカの大平原でみられるように，農業の省力化と経営

規模の拡大にともない、農場数と農村人口が減少し、それが極端な場合には過疎化によって地域社会の崩壊にまでつながっていった (Nellis, 1992)。

これらの状況のもとで、従来のような生産性の追求や収入と経費を重視する農業から、環境に与える影響度を重視する農業への転換が、欧米で1980年代から提唱されるようになった。それは自然環境を破壊することなく、食料や繊維の生産のために資源を活用し、長期的に生産者と消費者の必要性を合致させようとすることである。Pierce (1990) によると、持続的農業の必要性は相互に関連する3つの農業問題に起因し、それは資源管理と食料供給、農業コミュニティという課題に結びついている。第1の課題は、農業は再生産資源に基づく産業であるが、資源を枯渇させる可能性もっており、現実にはさまざまな国々で資源の質的・量的消耗が進んでいるということにかかわっている。第2の課題は、急増する発展途上国の食料需要に応えとともに、先進諸国に対しても長期的に安全で安定した食料と衣料の供給が不可欠であることに關してである。そして第3の課題は、農業収入や農業資源へのアクセス、摂取栄養水準、1人当たりの生産量などに大きな格差があることに関係している。さらにこれらの自然・生物・社会システムを相互にむすびつけるという課題が第4のものである。Pierceは農業の発展を環境と調和させながら実現する一方、現在および将来とも食料と経済の側面で社会的需要を満たすようにすることが、農業の持続的発展であるとしている。Pierce (1992) はまた、持続的農業の概念規定にかかわる既存文献を整理し、(1) 再生産資源を再生産量を越える速さで使用しないこと、(2) 代換資源の開発の速度を上回るペースで非再生産資源を使用しないこと、(3) 環境の浄化能力以上の汚染物質を放出しないこと、という3つの原則を示している。

Smit and Smithers (1994) は、カナダを念頭に持続的農業を達成するために考慮すべきこととして、(1) より持続的性格の農業に転換するためのコストを誰が負担するか、(2) 持続的農業は環境の質や農業の生産性、消費者の満足度といった分析的なものではなく、農業に対する姿勢として捉えるべきではないか、(3) 食料の供給側ばかりではなく需要側にたって考えるべきではないか、(4) 農業が将来の様々な変化によっていかに影響を受けるかを予測するために、農業システムの性格をよく理解する必要がある、という4点をあげている。

田林 (1995, 2001) は畜産農場の事例研究に基づいて、1980年代後半から南オンタリオでは農業の持続的発展に通ずるいくつかの要素がみられるようになったことを指摘している。南オンタリオでは家族農場が依然として卓越し、後継者が育成されることによって、うまく農場経営が引き継がれ、安定した経営が継続している。また、就業機会に恵まれていることから、農場の経営者自身も家族も農外就業に多く就いている。このような就業の多様化が、収入の安定化をもたらし、これが農業の持続性につながっている。さらに、南オンタリオでは混合農業の伝統がいまだに強く、自分の農場で飼料を生産し、それを家畜に与え、さらに家畜の排泄物を農地に還元して肥料とする。このような閉じた生態系が農業の持続性にとって重要である。また、作物を多様化し、輪作方式を確立することが、農地の長期にわたる継続的使用と化学肥料と薬剤の消費を抑える1つの方策である。1980年代後半から南オンタリオの農民は、農場の施設と機械への投資を抑える傾向が著しくなっ

きた。それ以前の機械化・化学化への過信、生産性向上第一主義の姿勢から、効率や収益を下げて生活の質を尊重する傾向が強まっているようである。雇用労働者にまかせて、週末には休養をとったり、夏季には長期の休暇をとって旅行する農民が増えている。

V-2 農村の持続的発展

すでにみたように持続的農業あるいは農業の持続的発展について活発に議論されているが、近年では農業を行う場所、すなわち農村地域全体の持続性が問題にされるようになってきた。

カナダのマニトバ州における持続的農村地域の研究を行ってきたEveritt and Annis (1992) は、特に農村地域の住民の資質について検討し、持続的農村実現のための目標を17項目に整理した。これを要約すると、農村の構成員の資質、それらがつくる組織と指導者、さらに後継者の教育、社会的・経済的・文化的基盤の充実などが、重視されている。Curry-Roper (1992) によると、アメリカ合衆国では個人を優先し、コミュニティを除外した土地政策を強調する文化的伝統が社会に浸透しており、それゆえに個人の自発的な意志と行動が技術的側面とともに強調されてきた。しかし、現在の環境や農村問題を個人レベルで解決することは極めて困難で、コミュニティや社会組織のありかたを改善することが不可欠となっている (Pierce and Dale, 1999)。

1994年カナダ、オンタリオ州グエルフ大学では「持続的農村社会を目指して」と題する国際シンポジウムが開催された (ブライデン, 1998)。そこでは、持続可能な農村コミュニティとは、「他のコミュニティにおける再生産を減ずることなしに、経済的、社会的、文化的ならびに生態的意味で自らを再生産し、発展させる能力をもつコミュニティ」としている。このセミナーでの中心課題は、持続性や農村そしてコミュニティについての定義づけ、農業の持続性と農村の発展との関係、持続的農村と女性と家族そして世帯との関係、農村の変容と持続性、農村開発と制度上の構造、農村改革の教育や研究にとっての意味、市民社会や政府が農村の持続性実現にどのようにかわるかといった多様なものであった。

ところで、Bryant (1995) は持続的なコミュニティが形成されるための鍵となる戦略や計画を検討した。持続的コミュニティ形成には、コミュニティを統合するシステムや統合をリードするグループの存在が不可欠であり、地域スケールに応じて住民が統合システムに参加できるような方策をたてることが重要である。Roseland (1998) によると持続的コミュニティの発展は効率的な空間利用と社会資本の蓄積、消費の最小化、自由な住民移動の4つの条件によって支えられており、この4つの条件を結びつける核としての政策や行政の役割が重要である。つまりコミュニティの住民が従来のコミュニティの枠にとらわれず、職業の選択や施設の利用が自由にできるように社会資本を整備し、それによって空間利用や消費の無駄をなくすることが必要である。

V-3 農村地域における中心集落の再生

南オンタリオの農業地域における中心集落は1800年代にはサービスセンターとして繁栄したが、1911年から1960年代までに技術革新や生活様式と経済の変化によって (Davies, 1989)、中心機能

が低下するとともに人口も減少し、なかには完全に消滅してしまったものまである (Dhams, 1988b). ところが、1980年代からこれらの中心集落が、新しい住民や訪問者を引きつけるようになった。

農村地域の若者は地元を離れて都市に流出し、その両親が高齢化するという具合に人口の高齢化が進むが、他方では農村の静けさを求めて都市や町から人々が流入するようになった (Dhams, 1996).

ダムス (2004) が報告しているオンタリオ州のソーンバリーの事例では、1981年から1991年までに15%も人口が増加した。この町は元来農村地域のサービスセンターで、鍛冶屋や製粉所、万屋、ホテル、製材所、樽屋、皮なめし屋などがあったものが、これらに代わってアンティークショップやレストラン、ガソリンスタンド、酒屋、衣料品店、土産物屋などが出現した。ホテルに代わって民宿ができ、さらには美容院、政府機関、金融業が加わった。この町の経済にとって、スキー場や釣り場、ハイキングやボート遊び、水泳などができるビーチや川辺などを基盤としたアメニティ産業は極めて重要である。古い建築物を利用できるかどうか、中心集落再生の鍵である。観光・レクリエーション産業とともに、不動産市場も大きくのびている。また、小売業とサービス業の発展によって、ソーンバリーは雇用センターとしての役割を復活させた。この中心集落のアメニティ環境が、都市からの転入者を引きつけている。トロントへの近接性とともに、優れた風景、農村的な情緒、遺産建造物などが、ある場所にアメニティの価値をつけさせる重要な要素である (Coppac, 1988).

VI む す び

H.D. Cout は1972年に出版した *Rural Geography* において、「農村地域は第2次世界大戦前には人文地理学研究の中心をなしていたが、現在では地理学研究のフィールドとしては、より低い地位に後退してしまった。このような農村地域への興味の後退は、都市地理学における研究や専門知識の急速でかつ精緻な発展と対照的であり、それは世界規模での都市化の進行の影響を反映したものである。」と述べている。しかしながら、1980年代はじめまでに、地理学における農村地域への興味の復活が明確になってきた。

また、1980年代から農村地理学の内容にも変化が生じてきた。最近まで、農村地理学は伝統的に農業とそれに関連する歴史的な分析、農村地域の居住パターンと土地利用を分析する学問とされてきた。これらのことは、当然ながら依然として重要であるが、研究課題が大きく広がった (Gilg, 1985)。日本では農村地域に関しては古くから多くの研究が蓄積されてきたが、それぞれ個別に行われる傾向が強く、全体が一つの学問分野として整理・系統化されるには至っていない。また、欧米の農村地域研究において関心が高まっている新しい研究課題への取り組みが (Pacione, 1984)、日本ではいまだ少ない。そこで、この報告では日本における農村地理学を具体的に提示するために、農村地理学研究の先進地の一つであるカナダにおける農業・農村の盛衰と農村地理学の動向について検討した。

カナダにおいては、M.J. Troughton (1995) が指摘するように、近年の農村地理学研究の発展と隆盛は、一面では、農村や農業の後退にともなって起きてきた。すなわち、1930年代までカナダの農

村地域は拡大基調であった。1930年代と1940年代が発展と衰退の分かれ目であり、農村地域の衰退傾向が明確になった1950年代に農村地理学ができた。この頃には、それまで全体的に捉えられてきたカナダの農村地域が、中心農業地域と周辺限界農業地域、そして都市縁辺地域という3つの類型で考えられるようになった。

1960年代になるとカナダ楕状地や大西洋岸の周辺限界農業地域の多くは崩壊したが、地理学者はほとんど関心を示さなかった。西部の大平原に代表される中心農業地域では、農業の機械化・合理化・規模拡大にともなう農業の工業化が進んだが、そこでは農場数は激減し、農村のサービス機能が低下し、農村地域の弱体化が明確になり、この点に研究者の関心が向けられた。カナダの農村地理学研究が特に盛んに行われたのが、都市化が著しく進展した南オンタリオや南ケベックなどの都市縁辺地域においてである。そこでは変動する都市－農村地域における人口構造、土地利用、社会的・経済的性格、政治的状况などは特徴的で、これらの現象は多くの地理学研究者を引きつけている。また、このような現代の農業と農村をいかに持続的に発展させるかが重要な研究課題となっている。その一環として、農村地域の中心集落の再生に関しても強い関心が向けられている。

1970年代以降日本の農村地域は大きく変化したが、その状況はカナダの都市縁辺地域で1960年以降生じた現象と共通する点が多い。すなわち、従来のものとは性格を大きく異にした農村地域には様々な要素が含まれ、それらに対して多様な研究が必要になっている。

本稿のとりまとめにあたっては、平成13・14・15年度科学研究費基盤研究(B)(1)「日本における農村地理学の構築のための理論的・実証的研究」(代表者：田林 明，課題番号13480014)の一部を使用した。

参考文献

- 石原 潤 (2003)：『農村空間の研究(上)(下)』大明堂，470p., 464p.
- 田林 明 (1986)：カナダ，南オンタリオにおける農業地域区分に関する研究動向。人文地理学研究，**10**，151-187.
- 田林 明 (1988)：カナダの果樹地域における土地利用と農業経営の変化。カナダ研究年報，**8**，11-26.
- 田林 明 (1995)：カナダ，南オンタリオ農業の持続的性格。人文地理学研究，**19**，97-134.
- 田林 明 (2001)：カナダ，南オンタリオにおける混合農業の変容－G農場の20年－。人文地理学研究，**25**，37-60.
- 田林 明 (2003)：『北陸地方における農業の構造変容』農林統計協会，417p.
- ダムス，F. (2004)：カナダにおける中心集落の衰退と再生－1700年から2001年まで。金田章裕・藤井正編：『散村・小都市群地域の動態と構造』京都大学学術出版会，341-364.
- 浜谷正人 (1983)：欧米における最近の村落研究動向－社会・空間構成研究を中心として－。人文地理，**35**，311-327.
- ファラー，A.M. (1998)：アリーナ社会における持続可能な農村コミュニティ。ブライデン，J.M.編，岡部四郎・志村英二訳：『持続的農村社会をめざして』農山漁村文化協会，197-208.
- ブライデン，J.M.編，岡部四郎・志村英二訳：『持続的農村社会をめざして』農山漁村文化協会，375p.
- Beesley, K.B. (1991): Rural and urban fringe studies in Canada: Retrospect and prospect. In Beesley, K.B. ed.: *Rural Urban Fringe Studies in Canada*. Geographical Monographs, York University, **21**, 1-42.
- Bryant, C.R. (1995): Representation and segmentation: the strategic management and planning of sustainable community development. In Bryant, C.R. and Marois, C. eds.: *The Sustainability of Rural Systems*. Université de Montréal, 179-189.
- Bryant, R.C. and Johnston, T.R.R. (1992): *Agriculture in the City's Countryside*. Belhaven Press, London, 233p.
- Bryant, R.C. and Joseph, A.E. (2001): Canada's rural population: Trends in space and implications in place.

- The Canadian Geographer*, **45**, 132-137.
- Bryant, C.R. and Russwurm, L.H. (1984): Changing population distributions and rural-urban relationships in Canadian urban fields. In Bunce, M.F. and Troughton, M.J. eds.: *The Pressures of Change in Rural Canada*. Geographical Monograph, **14**, York University, 113-137.
- Bryant, C.R., Russwurm, L.H. and McKellan, A.G. (1982): *The City's Countryside: Land and its Management in the Rural-Urban Fringe*. Longman. 272p.
- Bryant, C.R., Russwurm, L.H. and Wong, S.-Y. (1984): Agriculture in the Canadian urban field. In Bunce, M.F. and Troughton, M.J. eds.: *The Pressures of Change in Rural Canada*. Geographical Monographs, York University, **14**, 12-33.
- Bunce, M. (1981): Rural sentiment and the ambiguity of the urban fringe. Beesely, K.B. and Russwurm, L.H. eds.: *The Rural-Urban Fringe: Canadian Perspectives*. Geographical Monograph, York University, **10**, 109-120.
- Bunce, M. (1994): *The Countryside Ideal*. Routledge, New York, 232p.
- Bunce, M. and Walker, G. (1992): The transformation of rural life: The case of Toronto's countryside. In Bryant, C.R. and Nellis, M.D. eds.: *Contemporary Rural Systems in Transition Vol.2, Economy and Society*. CAB International, 49-61.
- Carlyle, E.J. (1997): The decline of summer fallow on the Canadian Prairies. *The Canadian Geographer*, **41**, 267-280.
- Clout, H. D. (1972): *Rural Geography: An Introductory Survey*. Pergamon Press, 204p.
- Coppac, P.M. (1988): Reflection on the role of amenity in the evolution of the urban field. *Geografiska Annaler (B)*, **70**, 353-362.
- Curry-Roper, J. (1992): Alternative agriculture and conventional paradigms in US agriculture. In Bowler, I.R. Bryant, C.R. and Nellis, M.D. eds.: *Contemporary Rural Systems in Transition, Vol.1*, CAB International, 254-264.
- Dahms, F.A. (1998a): Settlement evolution in the Arena society in the urban field. *Journal of Rural Studies*, **14**, 299-320.
- Dahms, F.A. (1988b): *The Heart of the Country*. Deneau, 191p.
- Dahms, F.A. (1991): St. Jacobs Ontario: From declining village to thriving tourist community. *Ontario Geography*, **36**, 1-13.
- Dahms, F.A. (1996): The greying of south Georgian Bay. *The Canadian Geographer*, **40**, 148-163.
- Dahms, F.A. (2001): *Beautiful Ontario Towns*. James Lorimer and Company, 96p.
- Davies, S. (1989): Reckless walking must be discouraged : The automobile revolution and the shaping of modern Canada to 1930. *Urban History Review*, **18**, 123-138.
- Everitt, J. and Annis, R. (1992): The sustainability of Prairie rural communities. In Bowler, I.R., Bryant, C.R. and Nellis, M.D. eds.: *Contemporary Rural Systems in Transition Vol.2, Economy and Society*. CAB International, 213-222.
- Fuller, A.M. (1984): Part-time farming: The enigmas and realities. *Research in Rural Sociology and Development*, **1**, 187-219.
- Fuller, A.M. ed. (1985): *Farming and Rural Community in Ontario: An Introduction*. Foundation for Rural Living, 364p.
- Gayler, H.J. (1982a): The problem of adjusting to slow growth in the Niagara region of Ontario. *The Canadian Geographer*, **26**, 165-172.
- Gayler, H.J. (1982b): Conservation and development in urban growth: The preservation of agricultural land in the rural-urban fringe of Ontario. *Town Planning Review*, **53**, 321-341.
- Gayler, H.J. (1991): The demise of the Niagra fruit belt: Policy planning and development options in the 1990s. In Beesley, K.B. ed.: *Rural Urban Fringe Studies in Canada*. Geographical Monographs, York University, **21**, 283-313.
- Gertler, L.O. (1970): Regional planning and development. In Krueger, R.R. et. al. eds.: *Regional and Resource Planning in Canada*, Holt, Rinehart and Winston, 29-37.
- Gilg, A. (1985): *An Introduction to Rural Geography*. Edward Arnold, 210p.
- Halseth, G. (1995): Complexity in the rural Canadian housing landscape. *The Canadian Geographer*, **29**, 336-352.
- Harris, R.C. (1966): *The Seigneurial System in Early Canada- A Geographical Study*. The University of Wisconsin Press, 247p.
- Harris, R.C. and Warkentin, J. (1974): *Canada before Confederation*. Oxford University Press, 338p.

- Johnston, R.J., Gregory, D. and Smith, D.M eds. (1994): *The Dictionary of Human Geography, the Third Edition*. Blackwell, 724p.
- Jones, R.C. (1946): *History of Agriculture in Ontario 1613-1880*. University of Toronto Press, 420p.
- Keddie, P.D. and Mage, J.A. (1985): *Southern Ontario Atlas of Agriculture: Contemporary Patterns and Recent Changes*. Department of Geography, University of Guelph, 85p.
- Kelly, K. (1973): Notes on a type of mixed farming practiced in Ontario during the early nineteenth century. *The Canadian Geographer*, **17**, 203-219.
- Kerr, D.C. (1952): The physical basis of agriculture in British Colombia. *Economic Geography*, **28**, 229-239.
- Krueger, R.R. (1959): The disappearing Niagara fruit belt. *Canadian Geographical Journal*, **80**(4), 102-113.
- Krueger, R.R. (1960): Land-use changes in the Niagara fruit belt. *Geographical Bulletin*, **14**, 5-24.
- Krueger, R.R. (1968): Community planning and local government. *Community Planning Review*, **18**(4), 16-21.
- Krueger, R.R. (1969): Regional development in Ontario. *Ontario Geography*, **4**, 3-4.
- Krueger, R.R. (1977): The preservation of agricultural land in Canada. In Krueger, R.R. and Mitchell, B. eds.: *Managing Canada's Renewable Resources*, Methuen, 119-131.
- Krueger, R.R. (1978): The urbanization of the Niagara fruit belt. *The Canadian Geographer*, **22**, 170-194.
- Krueger, R.R. (1982): The struggle to preserve speciality crop land in the rural-urban fringe of the Niagara Peninsula. *Environments*, **14**(3), 1-10.
- Krueger, R.R. (1984): The urbanization of Canada's fruitlands: the Niagara fruit belt and the Okanagan Valley. *The Operational Geographer*, **4**, 33-34.
- Lehr, J. (1998): Western Interior: Transformation of a hinterland region. McCann, L. and Gunn, A. eds.: *Heartland and Hinterland-A Regional Geography of Canada*. Prentice Hall Canada, 269-319.
- Lewis, G.J. (1979): *Rural Communities: A Social Geography*. David & Charles, 255p.
- Mage, J.A. (1975): A typology of part-time farming. In Fuller and Mage J.A. eds.: *Part-time Farming: Problem or Resource in Rural Development*. GeoAbstract, 6-37.
- McLwraith, T.F. (1995): The Ontario country road as a cultural resource. *The Canadian Geographer*, **39**, 323-335.
- Nellis, D. (1992): Agricultural externalities and the environment in the United States. In Bowler, I.R. Bryant, C.R. and Nellis, M.D. eds.: *Contemporary Rural System in Transition, Vol. 1*, CAB International, 131-141.
- Pacione, M. (1984): *Rural Geography*. Harper & Row, 384p.
- Pierce, J.T. (1990): *The Food Resources*. Longman, 334p.
- Pierce, J.T. (1992): Progress and the biosphere: The dialectics of sustainable development. *The Canadian Geographer*, **36**, 306-320.
- Pierce, J.T. and Dale, A. eds. (1999): *Communities, Development, and Sustainability across Canada*. UBC Press, 302p.
- Reeds, L.G. (1955): *The Agricultural Geography of Southern Ontario*. Unpublished Doctoral Dissertation Submitted to the University of Toronto. 429p.
- Reeds, L.G. (1959): Agricultural regions of southern Ontario, 1880 and 1951. *Economic Geography*, **35**, 219-227.
- Reeds, L.G. (1964): Agricultural geography :Progress and prospects. *The Canadian Geographer*, **8**, 51-63.
- Roseland, M. (1998): *Toward Sustainable Communities*. New Society Publishers, 241p.
- Smit, B. and Smithers, J. (1998): Sustainable agriculture: Interpretations, analyses and prospects. *Canadian Journal of Regional Science*, **16**, 499-542.
- Spelt, J. (1972): *Urban Development in South Central Ontario*. Carleton University press. 223p.
- Simpson-Lewis, W. et. al. (1979): *Canada's Special Resource Lands: A National Perspective of Selected Land Use*. Map Folio, 4, Environment Canada, 52-55.
- The Centre for Resource Development, University of Guelph (1972): *Planning for Agriculture in Southern Ontario*. ARDA Report 7, 152-168.
- Troughton, M.J. (1982): *Canadian Agriculture*. Akademiai Kiad, 355p.
- Troughton, M.J. (1983): Exurban development and land transformation : The case of Ontario. *Landscape Planning*, **10**, 335-354.
- Troughton, M.J. (1985): Stress on land in southern Ontario. *Ontario Geography*, **26**, 25-36.
- Troughton, M.J. (1995): Presidential address: Rural Canada and Canadian rural geography-An appraisal. *The Canadian Geographers*, **39**, 290-305.

Changing Rural Regions and Research Trends of Rural Geography in Canada

TABAYASHI Akira

According to H.D. Clout (1972), rural geography was at the core of studies in human geography prior to World War II, but by the early 1970s it had been relegated to an inferior position. However, as Pacione (1984) observed, by the early 1980s a revival in the academic fortunes of rural geography is apparent in Western Europe and North America. Even in Japan the countryside as a field of geographical research has become important since the 1980s, and the subject of rural geography has expanded to comprise various phenomena, in addition to the traditional topics of agriculture, settlement and land use patterns. At present it is important for we Japanese geographers, who are interested in the countryside, to establish and develop concepts and a methodological framework for rural geography. To pursue the subject this report tries to analyze the trends of rural geography in Canada.

Initial agricultural activity in Canada was by indigenous people in the Great Lakes Lowlands at least five hundred years ago. European settlers first cleared ground in 1603 in the Bay of Fundy area in what is now Nova Scotia. Then, agriculture expanded into Southern Quebec from the 17th to 18th centuries, and then rapid agricultural development followed in Southern Ontario in the 19th century. Prairie settlement and agricultural development took place in the first 30 years of the 20th century (Troughton, 1982). Canadian agriculture and rural regions had developed by 1930. The 1930s and 1940s appear as a watershed between growth and accelerating decline. Thereafter, all the major sectors of the rural resource economy, including agriculture, forestry and fishing, and their associated communities, have experienced severe declines.

As M.J. Troughton (1995) indicated, rural geography in Canada has shared in the overall growth of the discipline, which began in the 1950s, while rural Canada has fared less well. Canadian rural geographers, in particular, have developed a sustained interest in the rural-urban fringe zone. Rural-urban fringe studies in Canada have their roots in land-use analysis epitomized by the work of R. Krueger and others on the Niagara fruit belt in the 1950s. Since then, research on rural-urban fringe themes has been expanding and diversifying, but a few major themes can be identified: land use analysis; social and economic perspectives; and applied, policy and planning approaches (Beesley, 1991). In addition, one of the main research topics for rural geographers in Canada is sustainable rural development.

Key words: Rural geography, rural-urban fringe, sustainable development, Canada